

古今集に現れたる薬用植物三種に就いて

柳川リハビリテーション学院言語聴覚学科 1年 山口 信

1999. 11. 1

1. たちばな(みかん) 一生薬名 陳皮

139 さつきまつ花たちばなのかをかけば 昔の人の袖のかぞする

よみ人しらず

(訳) 五月を待って咲く花たちばなの香りをかいだところが、昔なじみの人の袖の香りを思い出して懐かしかった。

橘は 430・668 に「山橘」とあり、『古今集』の頃には既に野山に自生したことが考えられる。しかし、垂仁天皇の代、田道間守が天皇の病気の薬として中国から持ち帰り、天皇の死を知って陵の前で泣き死にをしたという有名な伝説があるので、橘が日本人にとって渡来植物であるという認識が古代にあったのは間違いない。柑橘類の中でも甘みがあるのを特徴とするミカン類はマレー半島及びインドシナ半島、中国南部及びフィリピンにわたる地域が原産地である。ただし、現在我々が普通に「ミカン」として食べている温州みかんは、江戸中期、日本の長崎地方で突然変異により発生したといわれる。田道間守の伝説からも分かるように、ミカン類は古代から薬用植物として認識されており、『本草和名』にも名前が見える。江戸時代、大阪の中山芳山堂発行の『買物独案内』の中に「御薬・柑橘酒・御代五朱」とある。また、『本朝食鑑』ではミカン酒にふれ、「主治未だ詳らかにせざるも、胸を開き、食を進む」と述べている。果皮には精油を含み、リモネン 90 パーセント、フラバノン配糖体のヘスペリジン。果汁にはクエン酸 1-3 パーセント、ビタミンCを含む。現代の漢方では主に果皮を乾燥した陳皮を用いる。咳止め・風邪薬として陳皮 5 グラム、砂糖少量に熱湯を注いで、熱いうちに服用する。生のミカンの皮 (20 個) を布袋に入れ、風呂に浸けて入浴すると、血行をよくし、湯冷めしない。ハーバリストたちは柑橘類の精油を不安症や鬱病のアロマセラピーに用いる。

橘が現在の柑橘の何に当たるかということには諸説あり、一定しないが、『玉勝間』巻 14 の 59 に「いにしへは、橘をならびなき物にしてめでつるを、近き世には、みかんといふ物ありて、此のみかんにくらぶれば、橘は数にもあらずけおされたり、その外かうじ、ゆ、くねんぼ、だいだいなどの、たぐひおほき中に、蜜柑ぞ味ことにすぐれて、中にも橘によく似てこよなくまされる物なり」とあるので、少なくとも宣長は、橘は蜜柑とは似て非なるものであり、かつその他の柑子・柚子・九年母・橙などとも別のものだという認識をしていたことがわかる。しかも、「みかんといふ物」という表現からは蜜柑が新しいものであるという意識が感じられる。また、『大和本草』には「橘 説文云 たちばなと訓ず みかんなり 其花をたちばなと古歌によめり」とあるので、益軒は橘はミカンそのものだと考えていたようだ。温州みかんが地方の品種を脱して日本中に広まったのは明治以後のことだから、この場合の「みかん」は紀州みかんでなければならず、この江戸時代後期の二人の学者の記述からすれば、橘は紀州みかんによく似ていてその原種的なものだと考えられる。これに該当するのはニッポンタチバナ、あるいはコミカンか。いずれにせよ花の香りが強く、果実に甘みのある柑橘類であろう。

《原産地》 東南アジア及び華南

《薬用部位》 果皮

《薬効》 鎮咳・鎮静

《薬用成分》 ヘスペリジン・ビタミンC

2. はちす(はす) 一生薬名 蓮実・蓮肉・蓮子

165 はちすばの にごりにしまぬ心もて なにかはつゆをたまとあざむく

僧正遍昭

(訳) 蓮の葉は泥水の中に育ちながらその濁りに染まない清い心をもって、どうして葉に置く露を宝石と見せかけるのか

北海道の第三紀層から葉の化石が、また京都近くの洪積層から果実の化石が出土している。また、大賀博士のハスの実も著名である。この植物も古くから日本にあったようだが、原産地はアジア熱帯からオーストラリアー帯原産とされる。ヨーロッパ南部にも分布の後があるという。おそらく栽培発祥地はインドで、中国へは古代に伝わり、『爾雅』(BC400)の記録が最も古い。特に揚子江沿岸が古くからの栽培中心である。日本へは朝鮮を経て仏教渡来前の雄略天皇の代(5世紀)に伝来したといわれ、『古事記』にも記述がある。栽培ハスとしては承和 14(874)年に慈覚大師が唐から蓮根を持ち帰り、奈良の当麻寺に植え、それが寺院を通じて各地に広まった。その後も道元をはじめ多くの僧が中国から導入している。蓮根中にはアミノ酸のアスパラギン、チロシンなどを含み、果実にはアルカロイドのネルンビン、ロツジン、アノナイン、リインジニン、プロヌチフェリンが含まれている。秋遅く、花托に含まれる果実を取り出し、皮を取り除き、種子だけを蒸してから陰干しにする。果実の皮付きを蓮実、皮を捨て去って種子だけ乾燥したものを蓮肉、蓮子と呼んでいる。古来から中国では蓮根と蓮種には老化を遅らせる働きがあり、さらに蓮葉を含めて、脂肪を減らす食物であると信じられて来た。また、根茎の汁液は湿疹やにきびの服用薬として、蓮根で作った粥は吐き気を治める薬として用いられて来た。蓮種は強心剤として、蓮葉は日射病の治療や解熱に用いられた。花と花糸と柄の汁液は、強心剤として用いられていた。現代の漢方では扁桃炎、喉の腫れなどに蓮根を皮付きのまま刻み、一日量 50 グラムを煎じ、うがい薬として使用する。蓮実あるいは蓮子を一日量 10 グラムフライパンで炒り、3 回に分けて食べると滋養・強壮・健胃薬となる。

ハスといえはすぐに仏像の台座を連想するほどに仏教との関係が深い。165 の歌も『法華経』に「善く菩提の道を学んで世間の法に染まず、蓮華の水に在るが如し、地より湧出し皆恭敬の心を起こす」とあることを踏まえた歌である。しかし、この歌にしても『万葉集』のハスを詠んだ4首にしても、蓮華の美しさを詠んだものではなく、詠者の関心が蓮葉、特にそれに宿る露に向けられているのは不思議である。そもそも「はちす」という名前にしてからが、花の特徴ではなく花が枯れた後の花托が蜂の巣に似ていることに由来している。これらのことの意味するところは、古代の日本人にとって、蓮華よりそれ以外の部分に関心が向いていたのか、あるいは蓮華を詠んだものはあまりにも陳腐なものとなって歌集に採られなかったのか、いずれかであろう。現代の日本人にとっても蓮華はラーメン屋のスプーンの名前になっているほどポピュラーなものだから、おそらくは後者であろうと思うが、他の文学作品をつぶさに調べた訳ではないので断定はできかねる。

《原産地》アジア熱帯からオーストラリア

《薬用部位》種子、葉、花、根

《薬効》抗炎症、滋養・強壮、健胃、強心

3. なつめ 一生薬名 大棗

455 あぢきなし なげきなつめそ うき事にあひくる身をば すてぬものから

兵衛

(訳)つまらないことだ、そうひどく嘆きつめるなよ。つらい目にあって生きて来る身を捨ててもならないものの、しかしなあ。

ナツメはヨーロッパ南東部から西アジアを経て東部までの広範な地域が原産地とされる。中国から西北・河北で極めて古くから栽培された。『夏小正』や『周来』『詩経』にその記載が見え、『史記』には「安邑千樹の棗」と、あるいは『戦国策』には「北に棗栗の利有り。民、田作せずと雖も、棗栗の実、民を食ふに足る」とあり、棗が栗とともに救荒食としての役割を持ち、栽培が重視されていたことが分かる。なつめは日本の文献では『万葉集』に「棗」として初めて現れ、『延喜式』には「乾棗」や「大棗」の名で、『本草和名』『和名抄』には「奈豆女」「奈都女」という名で出ており、奈良時代より以前に中国から伝来したと思われる。日干しで乾燥してから蒸して再び日干ししたものを大棗と呼び、35度の焼酎1升到300グラムほど浸け、3ヶ月冷暗所に放置したものを布で漉すと大棗酒ができる。大棗酒は1日30ミリリットルを限度に就寝直前に服用して滋養・強壮薬とする。甘麦大棗湯(大棗6グラム、甘草5グラム、小麦20グラム)を水240ミリリットルで半量まで煎じて、1日3回服用すると胃痙攣・子宮痙攣の鎮痛薬となる。甘麦大棗酒は神経の興奮をしずめ、不安・不眠・眩暈にもよく、小児の夜泣きにも少量飲ませるとよく効く。現代中国では抗ガン剤の処方に加えている。果実からは咳止めドロップを作る。樹皮は下痢止めや解熱に、根は解熱や育毛促進に用いている。利尿作用もある。

ナツメは中国では桃・李・杏・栗とともに五果の一つに数えられているほど重要な植物だが、古代日本人の創作意欲はかき立てなかったようで、『万葉集』に2首、『古今集』には445のみ(筆者の調査した範囲であり、異本、異名、折句などあるかもしれない)が収録されている。『万葉集』3830の歌のみが生活・感情に密着した歌でありナツメの花が庭一面に散った様を想像させて美しいが、この445と『万葉集』3834はいずれも他の植物とともに語呂合わせ的に詠みこまれ、博物誌的かつ戯歌的である。それにしても、『万葉集』に見られる150種ほどの多種多様な植物が、収録歌数が違うとはいえ、『古今集』には登場せず、桜・梅・橘・秋の七草などの極めて限定された植物しか現れないのは寂しい。『古今集』の植物を研究した文献は見つけることができなかつたし、『古今集』の植物を自力で数え上げて分類するのは筆者の手に余るが、植物の種類が激減していることだけは確かである。これは国風文化成立の過程で、外来のものも含めた多種多様の植物の中から、日本人の美意識にかなったものだけがクローズアップされ、いわば定番としてもてはやされるようになった結果であろう。それだけ一つの植物についての表現が深められ洗練されたともいえるが、歌の材料についてパターンが決まってしまったともいえる。感性が鈍く目に一丁字ない筆者のような者には『万葉集』の雑多さが好ましく、『古今集』は同工異曲の集まりに見えてしまう。

《原産地》ヨーロッパ南東部から華北

《薬用部位》果実(樹皮・根も)

《薬効》滋養・強壮、鎮痛・鎮静など

《薬用成分》各種アミノ酸・各種アルカロイドだが主薬効成分は不明

4. まとめ

以上『古今集』に現れた三つの薬用植物について述べてきたわけだが、三つとも我々が今日漢方薬と聞いて連想するような植物ではない。我々が一般的な漢方薬として知っているものは主として植物のアルカロイドを薬効成分として利用するものであり、苦くあるいは渋く、使用量を誤れば毒となって命をも危うくするものである。これに対して古代に薬として外国から導入された植物には、現在では果物と

してしか考えられていないような甘いもの、つまり主成分が糖類であるものも多い。文字通りそれを摂取することが楽しい「薬」である。これは高度成長までの日本人の主要な疾病が栄養不足に起因するものであったこと、外来のものは何でも一応は有難がる日本人の昔からの心性を考えればある程度頷ける。しかし、日本人の薬観が(「薬喰い」というような言葉はあるものの)中国のような「医食同源」に進まなかったのは何故か、いつごろから「良薬は口に苦し」という薬観が主流となっていったのか、興味のあるところであり、今後の研究課題である。尚、引用した短歌は岩波古典体系『古今和歌集』のものである。

《参考文献》

- 伊沢一男 薬草カラー図鑑 主婦の友社
星川清親 栽培植物の起源と伝播 二宮書店
L. ギイヨ 栽培植物の起源 八坂書房
牧 秀夫 果物屋さんが書いた果物の本 三水社
前田信之助 八百屋さんが書いた野菜の本 三水社
松山利夫・山本紀夫 木の実文化史 朝日新聞社
朝日新聞社編 毒草薬草 300 朝日新聞社
レスリー・ブレムネス ハーブの写真図鑑 日本ヴォーグ社
松田 修 万葉の植物 平凡社
中西 進 万葉の花 平凡社
大貫 茂 ハーブ万葉集 白水社
牧野富太郎 植物知識 講談社